

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

県東北部、大和高原の秋祭りには、スマウのほか田楽や翁舞も行われる。田楽は平安時代に大流行した芸能で、田植えを囃す樂から起つたとされ、飾り立て練り歩く風流田楽や專業田楽法師の活動へと発展した。樂器には、太鼓・鼓・笛の他に短冊形の竹や木を編んで繋いだササラという樂器を用いるのが特色である。

田楽と言えば、年末の春日若宮おん祭りで、華やかな衣装に身を包んだ田楽座の人々が、松の下や御旅所で演じるが、大和高原各地の田楽は、この春日田楽とはまったく様子が異なっている。確

認された14例の田楽の芸態は、全員または1人でまわる、詞章を唱えながらその場でまわる、床や

樂器を扇で煽ぎながらまわる、樂器の周囲を跳ぶ、互いに行き違つなどである。これをさらに単純化する。「まわる」「跳ぶ」「往復する」という三つの動作となる。

この動作の中でも最も注目されるのが、樂器を中心にして、そのまわりを扇で煽いでまわったり、飛びまわったりすることだ。こうした所作は柳生では田楽の所作を俗に「田の草取り」と呼んでいる。丹生では、樂器を本殿前の舞台中央に置いて、このまわりをますます扇で煽いでまわり、その後、この樂器のまわりを3回跳んで一周するが、これを横跳びと呼ぶ。樂器のまわりを扇で煽ぐのは作物を育てるつもり、跳ぶのは豊作で小躍りす

奈良市丹生・大保や山添
村北野・峰寺・松尾・的
野で行われている。

樂器を中心、その周囲を煽ぎまわる、また跳びまわるという不思議な



山添村峰寺の六所神社で行われるホーテンガク(シンパイ)

跳んで田植えを囃す樂

表)

(奈良民俗文化研究所代

II次回は11月13日

所作は、いったい何を意味しているのだろうか。樂器がよく鳴るようにしているとは思われない。地元ではこうした所作にいろいろ伝承がある。大和高原では田楽の所作を俗に「田の草取り」と呼んでいた。さらに想像を逞しくすれば、樂器で連想しながら行っていたのだった。さらに想像を逞しくすれば、樂器で何かを象徴しそれを「囃す」行為をしていたのだ

った。では樂器は何を象徴しているのか。それは「苗」だろうと私は考えている。田植えを囃す樂としての原点が伝承されているのだろう。

るさま、樂器を周囲の者が倒すのは、大水や台風の来襲のさまで、全体として作物の豊作を祈っているのだという。樂器を中心、人が扇で煽いだり、飛びまわったりすることを、人々は農作業を連想しながら行っていたのだった。さらに想像を逞しくすれば、樂器で何かを象徴しそれを「囃す」行為をしていたのだ